

浄土

monthly
JŌDO

1

January 2006



法然上人鑽仰会



一丈の堀をこえんと思はん人は

一丈五尺をこえんと励むべし



法然上人御法語

「つねに仰せられける御詞」458

東京江戸川

大雲寺

寺に歴史あり

人々に信仰あり

日本の

心の故郷を紀行する

寺院紀行

寺院紀行



長行山専称院大雲寺本堂。本堂は平成三年に、客殿は平成十一年に新しく建て直された。右は役者寺の別名を持つ大雲寺ならではの寺宝でもある十七世市村羽左衛門の押隈



本尊阿弥陀如来座像は十九世龍童住職代の骨仏



大雲寺本堂内陣。本尊の前に立つ阿弥陀三尊像は善光寺の一光三尊阿弥陀如来で、本堂落慶時の角塔婆で彫った



坂東彦三郎代々の墓。初代から七世までが眠る



初代から十七世までの市村羽左衛門が眠る市村家の墓



三世尾上菊五郎の記念碑



板東楽春の墓



『歌舞伎年代記』に記載のある水死之霊の慰霊碑。役者墓以外にもこうした関連の碑があるのが大雲寺の特長だ



役者墓は墓地入り口近くに並んでいる





第十八世脇坂亮音住職。明治初期の大雲寺を支えた



本所押上時代の役者墓の写真。左の写真とともに第十九世龍童住職が発行した『長行山史』より



客殿床の間に祀られている大黒天と恵比寿様。本来は仁王像の代わりに三門に安置する予定だった

浄土

2006/1月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 東京江戸川大雲寺	写真=タカオカ邦彦	1
いまなぜ法然上人讃仰か	佐藤良純	6
寺院紀行 東京江戸川大雲寺	真山 剛	8
表紙の言葉	梶谷佳加	17
出雲紀行	森 清鑑	18
会いたい人 小沢昭一さん②	関 容子	26
響流十方	小村正孝	34
珈琲のことば 珈琲のじかん	藤原理加	38
浄土誌面を飾った人々		40
Jフォーラム		47
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	51
編集後記		52

表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎



いまなぜ 法然上人 鑽仰か

理事長

佐藤良純

法然上人鑽仰会が浄土宗の有志を結集して発足したのは、昭和九年（一九三五）のことであった。翌昭和十年四月十二日に正式の発会が認められ、浄土宗報（第二百十二号）にその旨が掲載された。同年、法然上人鑽仰の運動を実りあるものとするため、雑誌『浄土』が創刊され、五月には第一号が発行された。以後、戦乱による休刊を経て、昭和二十一年三月に復刊、平成十八年二月には、通巻第八〇〇号が発行される。七十余年に渉る長い道のりであった。昭和九年という年は、友松圓諦師が「法句經講義」を著し、「全日本真理運動」を展開し、山崎弁栄上人の「光明会」も活発な運動を行った時期である。友松師のラジオを通じての「法句經講義」は、新しい試みとして、広く注目を集めたのである。『浄土』には、法然上人の教えのみならず、多方面に渉る論考が掲載された、また中村弁康師の「信仰相談」には、当時の人々の悩み、苦しみ、悲しみからの救いを求める声がよせられ、心のこもった説得力のある回答とともに大きな反響をよんでいた。

時は移って世は平成の年、日本は第二次世界大戦という未曾有の危機をなんとか乗り切ったが、日本人の精神的バックボーンとなる宗教、倫理、道德の基盤は全く変わってしまったといわざるを得ない。昨今の物質文明の進歩発展は目を見はるものがある。日常生活は豊かになったが、人の心はそれに反比例しつつ、貧しくなってしまったような気がする。

法然上人も鎌倉時代、世情騒然とした中であって、貴族、武士、市井の民衆など、あらゆる人々に救いをもたらす教えを求め、八万四千といわれる仏教の法門の中から、「念仏の教え」を選びとり、「ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑いなく往生するぞ」と思い取りて申す外には、別の仔細候わず」と説かれた。この数行に、我々は、法然上人のひたむきな信仰を強く感じとることができる。

残念ながら「往生」の言葉は、今では「行き詰まった」、「亡くなった」の意味に使われることが多いが、元来ここには「死ぬこと」の概念はない。江戸時代の名僧、徳本上人は、「往生という字は、死ぬるという字に書きはせぬ。往き生まると書くぞよ。この通りに心得て、精出して念仏申さつしやるがよい。さっぱりと死ぬるのじゃないぞよ。極楽へ生まれるのじゃ。」と実に明快にその意味を説いている。

すべての衆をお救いくださる阿弥陀仏を信じ、南無阿弥陀仏と称えることにより、この世は安穩に、命終わってから極楽浄土に往きて生れる教えを示してくださった法然上人に、我々はあらためて、鑽仰の心をささげたいと願う。

寺院紀行

東京・江戸川

大雲寺

撮影／タカ才力邦彦

文／真山剛



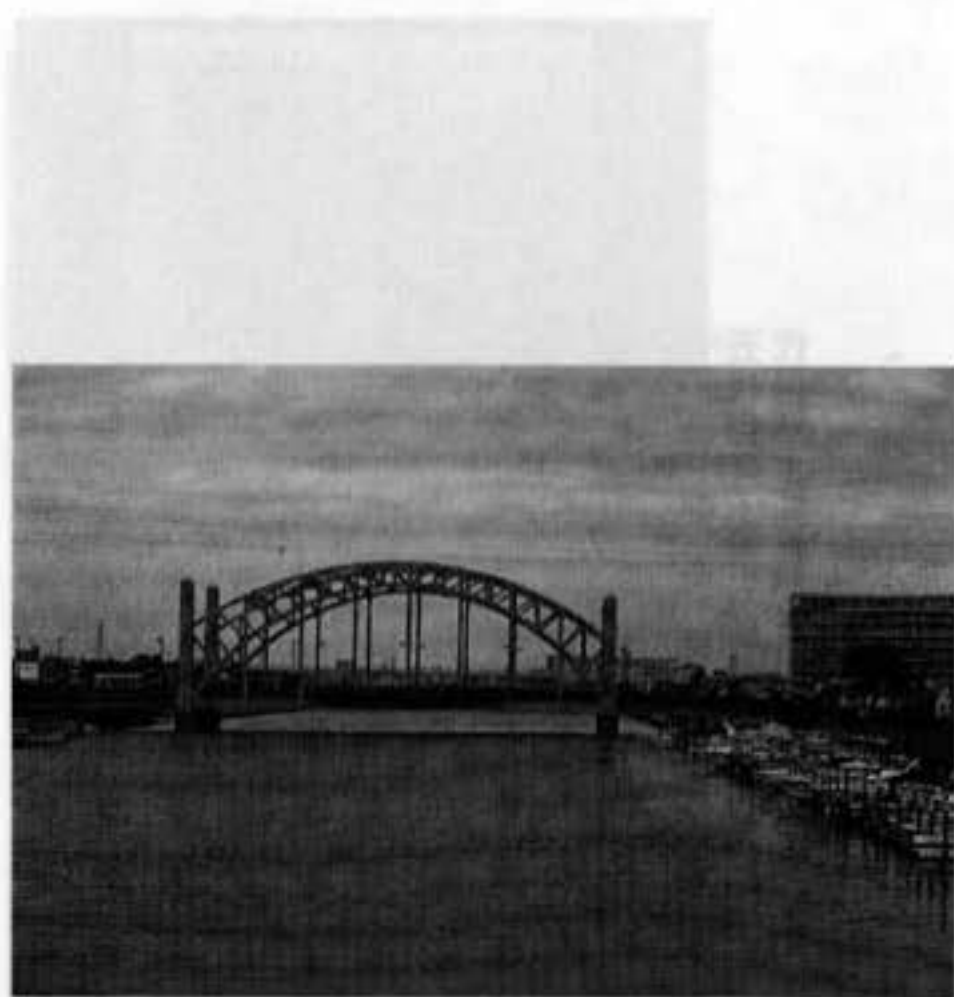
今年もまた除夜の鐘を聞きながら新年を迎える。年々月日の経つのが速くなるが、この寺院紀行が始まってもう十年の年月が過ぎた。そんなに経つのか、と思いながら取材した数々の寺院を思い出ししてみた。歴史ある伽藍、由緒あるお堂、掃除の行き届いた庭園、厳かなご本尊、風格ある仏像や掛け軸、歴史上の人物由来の品々。そして、品性ただよう住職、気さくでざっくばらんな住職、真面目を絵に描いたような住職、おごそかな法要、活気ある行事……、振り返ると寺院にはいろいろな魅力がある。

十一年目のスタートとなるのは、東京は江戸川の大雲寺というお寺である。さて、この大雲寺の魅力は？

そう、このお寺の別名は役者寺。歌舞伎役者の墓が並ぶお寺である。市村、中村、尾上、坂東、瀬川、松本……、一度も歌舞伎を観たことがない人でも「役者さんの名前」と気づく名が並ぶ。

役者寺といわれる大雲寺の歴史はその創建当時から始まっている。元和六年（一六二〇）浅草の森田町に二代將軍秀忠公によって浄土宗総本山の知恩院直末の寺で、赤門寺として創建されたが、この浅草時代に初代中村勘三郎が、大雲寺の檀家になっている。以来、中村勘三郎は十三世までがここ大雲寺に眠ることになるが、初代との縁が役者寺の始めで今日で三百五十年にもおよぶ。十四世以降は別の墓地に眠っているが、昨年春、十八代目の襲名では十八代目中村勘三郎が一門の墓参にきている。

およそ五十年後の寛文八年、江戸大火で類焼し、大雲寺は本所押



第二十世正倫住職が名付け親となった明和橋。増上寺の椎尾大僧正が提唱した「明るく正しく和よく」からとっている

上に移り、この本所押上時代に役者が檀家となりお墓が次々と建立されている。どれだけ多くの役者さんが大雲寺に眠っているかは、何冊か出版されている有名人のお墓ガイドといった本を読めば、一目瞭然だ。むろん、だからといって歌舞伎役者さんがみんな大雲寺に眠っているわけではない。お寺によっては○代目○○さんのお墓があるというお寺もいくつかある。だが、そうしたお寺と一線を画し、役者寺と言い切れるのが、この大雲寺だ。その理由を大雲寺第二十一世西城宗隆住職に語っていただく。

「役者さんのお墓が多いことありますが、同時に役者絵を刷っていた菊屋福地家などのお墓もあり、『歌舞伎年代記』に記されている市村座、中村座による水難者の供養碑も残っています。」

歴史学者の方や江戸文化研究家の方がよくお見えになられますが、役者墓には役者とその支えとなった家族が入っており、またこうした墓碑が存在するのも役者寺ではなおっしゃいます」江戸三座といわれたうちの中村座、市村座の菩提寺としての大雲寺には、こうした役者を取りまく歴史的な墓碑も残っている。とはいえ、明治を境に苗字帯刀の時代となると大きく寺檀関係は変化する。それはさておき、大雲寺には役者寺ならではのエピソードもいくつかある。ここでは戒名の話を紹介しよう。

五代目尾上菊五郎。明治維新とともに人気を失った歌舞伎を、九代目市川團十郎とともに盛り返した救世主ならぬ立役者で、いまでも歌舞伎座ではこの二人の名をとった団菊祭を毎年行っていること



五代目尾上菊五郎の錦絵（死絵）。七代目尾上菊五郎さんから譲り受けた

からも、その偉大さがわかる。明治三十六年に菊五郎の葬儀が大雲寺で行われたが、百人以上の僧侶が読経し、沿道は仕事を放り出した「江戸っ子」で埋め尽くされた。と、ここまでは人気役者の葬儀だが、実は菊五郎には三つの戒名がついていたのである。

三つの戒名？ ただでさえ戒名は高いと聞いているのに三つもあったら大変だけどさすがは役者さん、などと思うのは下衆の勘ぐりで、人気役者になったが故の行き違いだが、ことの顛末はというと。

菊五郎さんは大雲寺の檀家なので、当然大雲寺の住職が戒名をつけた。戒名は榮隆院芳譽梅阿清翁居士。しかし、明治期の歌舞伎を建て直すほどの人気役者、あちこちに引き回されるのも仕事のうち。最肩筋の中で高野山の貫主と縁のある人でもいたのか、菊五郎さん、高野山からも戒名をもらってしまった。本人は亡くなってからのことで知る由もないのだが……。でその戒名が盛香院探玄清壽梅阿弥陀仏という戒名。高野山は真言宗、菊五郎さんに最高の名前をつけようと阿弥陀仏となつたらしい。しかし、この戒名を聞いて困ったのが亮音住職。阿弥陀仏とはつけられないからだが、遺族にとっては居士よりも阿弥陀仏の方がいい。そこで、住職は高野山のつけた戒名の上はそのままにして、下の阿弥陀仏を居士に変えた。結果的に自分のつけた戒名は、致し方ない反故にしたそうである。

こんなエピソードは役者寺ならではのだが、大雲寺は大正に入り大きな転換期を迎えることになる。大正十二年、関東大震災で灰塵に帰してしまったのだ。そして、大正十四年から現在地の江戸川区西



十五代市村羽左衛門の念持仏。小さな釈迦誕生仏で客仏として預っている

江戸時代、押上村大雲寺



大雲寺舊全景圖

江戸時代の押上村大雲寺の絵地図。
境内のあちこちに役者墓がある

瑞江に移転を初め、昭和六年にようやく移転を完了させたのだが、本所押上から比べると、当時の瑞江は淋しいところだった。この移転で遠くなる菩提寺以外にお墓を求める檀家さんも多かったようだ。

もちろん場所など関係なく菩提寺大雲寺を大切にしている檀家さんもいるが、人間国宝にもなった十七世市村羽左衛門もその一人だ。大正五年に生まれ、平成十二年、八十四歳で亡くなられたが、単に檀家というだけでなく、時の住職に色々な影響を与えてくれた役者さんだという。

現住職もそれこそ羽左衛門さんから発声方法を教わったり、あるいは逆に経文の読み方を教えたりと、役者寺、大雲寺ならではの役者さんと住職のエピソードはずっと続いている。

大雲寺第十八世脇坂亮音住職は「残菊物語」で有名な尾上菊之助からもらった襦袢を袈裟にし、後に内縁の妻の髪と一緒にそっと納めている。

第十九世は現在の西城宗隆住職の祖父になられる先々代龍童住職だが、龍童住職は本所押上時代から社会福祉に専心、水害や震災時にはお寺を避難所として開放したり、境内地には授産所を作ったり、児童公園や集会場も作った。

また大雲寺近くにあった紡績工場の女工さんたちにも布教をしていた。決して良いとはいえない職場環境にあった彼女たちをお寺に呼ぶことで、彼女たちに息抜きの時間と場所を作ってあげていたという。こうした女工さんを応援する中で、浅沼稻次郎も大雲寺を



役者墓の向かいに建つ花火で有名な鍵屋の墓

訪れている。

そして、関東大震災の一周忌供養に龍童住職は本尊を建立する。檀家とともに震災で亡くなった方々と無縁さまのお骨を自ら手で拾いコンクリートに練り込み、骨仏を造った。が、お骨を粗末にしたと警察に連行されてしまう。

その話を聞いたのが六世板東彦三郎で、彦三郎はすぐに駆けつけ、お骨を仏にしてどこが悪い、と住職をかばい、龍童住職は難を逃れた。

そして、その彦三郎さんの葬儀の時、後に十七世羽左衛門となった七世彦三郎に、「おまえを護ってくれるのだから、六世の骨を食べろ。俺も一緒に食べるから」と勧め、一緒にお骨を食べている。後に七世彦三郎は、戦地で爆撃を受けたときに奇跡的に避けられたのは、六世である父の声に導かれたお陰、とお骨を食べたことを住職に感謝したという。この話は現住職の結婚式で披露された。

また、檀家総代、役者、そして貧乏な家庭の葬儀は必ず自分で勤め、お金に困っている檀家の葬儀にはお布施以上の香典を持っていたくような人だったという。いまでも、かつてここの住職に世話になった、とお礼に来る人がいるという。

第二十世正倫住職は、昭和二十年から遷化する平成三年まで住職だったが、住職就任を戦地に行っている間に先代に決められた龍童住職の次男で、活動的で豪快だった先代とは逆に、物静かに法務をされた住職で、法儀司という威儀作法のいわば先生ということから



大雲寺正面にある瑞江の火葬場。横断歩道右手が入り口

内侍長として増上寺に勤め、増上寺の第八十三世から三代の大僧正にお仕えている。

この正倫住職がまだ副住職だったころ。父であり、先代であった龍童住職が法要が終わった後に、参列していた六世菊五郎さんに、「住職は去年の法要では数珠をこう持っていたが、今年は違う持ち方だった。なぜ違うのか」と聞かれて困ったのを目の当たりにしている。この一件以来、正倫住職は自分の僧侶としてのあり方を決めたという。

そうした先代を見ていた現住職の宗隆住職は、大正大学卒業後増上寺に入り、やはり威儀作法をしっかり身に付けている。

その宗隆住職と役者さんのエピソード。

女形の七世梅幸さんのご自宅へ伺った時の話。挨拶し、家に上がり、おもむろに仏壇でお経をあげた。読経後に奥様が住職に、「住職、うちではお茶を飲んでいただいて、しばらくしてから読経していただきたいのですが」とのこと。理由を聞くと、女形だった梅幸さんは楽屋でお茶を飲み、役のイメージをつくり、舞台の夫役の楽屋に挨拶に行き、戻って気持ちを落ち着け、衣装を整え舞台に立ったという。つまり役者同様、僧侶もお茶をのみ、衣を着替え、しばらく心を整え、そして読経に入って欲しいということだった。

羽左衛門さんから声の出し方を教わったと先に書いたが、役者も僧侶もどちらも声が命、よく通った声が出るかは重要な心得。宗隆住職は法式という僧侶の威儀作法に長けている方と聞いたが、こう



江戸川の名物、江戸風鈴屋さん

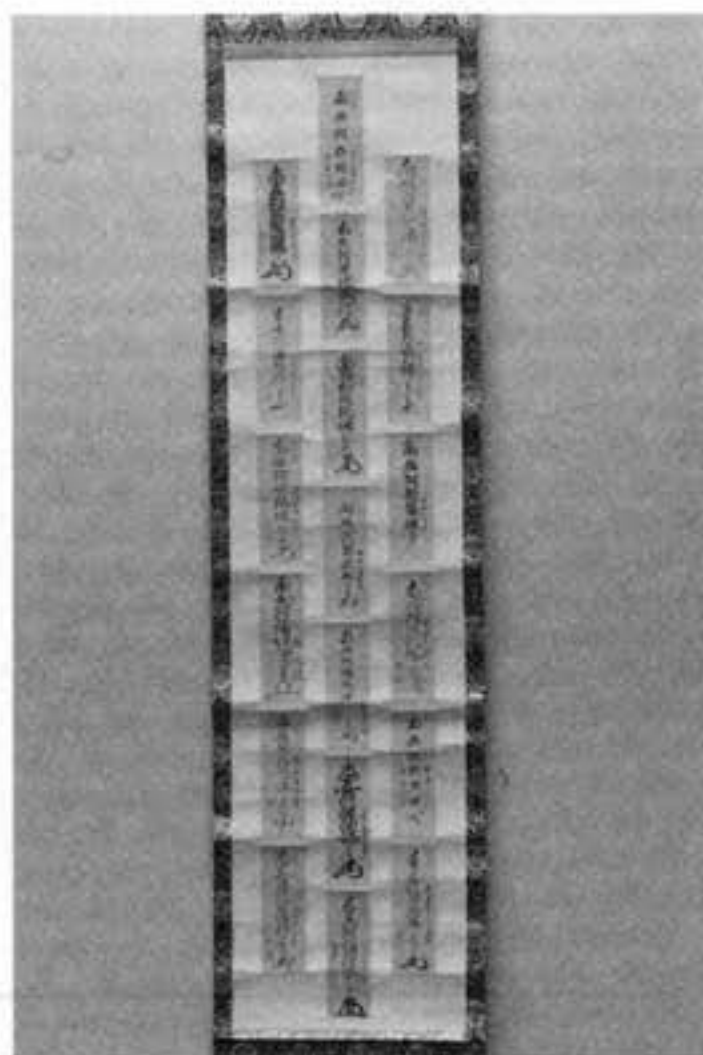
した役者さんからのアドバイスもその一助になっているという。

こうして、役者寺は単に有名な役者さんのお墓があるだけでなく、役者と住職が交流する中でお互いが研鑽する寺でもある。先代同様、現住職も外より内で、日常の読経はもちろん、先代同様役者さんのお経をあげ、お墓所の掃除に一番時間をかけているという。

だが、最近はその総合的な知識と実践の経験を買われ、大学で法式といわれる威儀作法とお経を教えているという。そんな住職に役者寺としての抱負を聞いてみた。

「この寺にとって、役者さんとの関わりは大きな意味を持ってきました。どの住職も役者さんやお檀家さんから色々教わってきました。時代も違い関わり方は変わっていますが、共通していることは型へのこだわりとその伝承にあるように思えます。ともに歴史と伝統の世界で、何百年も前の型がいまも続いている。でもその型が続いているにはちゃんとした理由がある。なぜそうするのかという精神を知ることなしに続ける危うさがある。この『型と精神』を一番大切にできる寺、そんな寺であることが役者寺ならではのかもしれません」

宗隆住職には最近、女の子が生まれた。まだよちよち歩きの妹の世話を幼稚園児のお兄ちゃんがやく。そんな子供たちを本当に嬉しそうに住職は見ている。大雲寺の魅力は、伽藍でもない仏像でもない。役者寺という有形無形の魅力だが、この魅力を住職はきつと厳しい目で次の世代に伝えていくことになるのだろう。（ルポライター）



関東十八檀林の住職の名号と花押の掛け軸。「檀林名号」と大雲寺十二世亨海の書が加えてある

2006

Kajitani Yoshika

梶谷佳加

比叡山の麓の小さな工房で、
その土地の土を丹念に練って、
陶人形を作っている一人の女性がいます。
郷土人形のような、
土の香りのするその人形たちから、
たくさんのぬくもりが伝わってきます。
誰もがみんな持っていた童心。
誰もがみんな大事にしたい童心。
そして誰もがみんな持ち続けたい童心。
そんな私たちの心に、
人形たちが呼びかけてくれています。

今年は、そんな梶谷さんの作品を
ご紹介したいと思います。

1970 奈良県生まれ

1988 京都芸術短期大学造形芸術学科陶芸コース入学

1989～入選歴

中日国際ビエンナーレ、京展、関西展

奈良展、天展、美濃国際陶磁展、長三賞展

1992 京都芸術短期大学陶芸コース専攻科修了

1997 滋賀県大津市山中町に独立

<http://www.eonet.ne.jp/~kajitani/>

1月号は 大黒様

七福神のお一人、頭巾をかぶり、左肩に大きな袋を負い、右手に打出の小槌を持っています。インド出身の神様で密教では自在天の化身、守護神、戦闘神あるいは忿怒神、後に厨房神とされました。わが国の大国主命と習合して民間に浸透、「えびす」とともに台所などに祀られ親しまれています。

(編集部)

表

紙

の

言

葉

出雲

紀行

第二回

森清鑑

玉造温泉

たまつくり 玉造温泉は古く奈良時代から人々に憩いと療養をもたらした温泉である。川が宍道湖に流れ込む両側に温泉街が形成されている。この川には足湯があり、川の傍からすでに温泉が吹き出ている。そこに保性館はある。ゆうゆう三百年の歴史を刻む温泉。今は新築されているが、ロビーから温泉に向かうとガラス越しに桃山造りのような歴史をとどめる旧旅館の建物が残されている。ここに昭和天皇も泊まった。川沿いに温泉が吹き出ている稀有な温泉街である。湯は無色透明でさらりと肌に溶け込む。取った部屋は角で左右ガラス越しの眺望。接点に湖が見える。温泉とビール、料理も盛り沢山で美味だ。

玉造温泉から湖沿いに左に曲がると「玉造伝承館」がある。温泉から歩いても十分程度の距離。ここは「めのう」工芸品の歴史ある伝承場。一級の職人が「めのう」を研いでい

る。工房に入ると神代からの絵と「勾玉」^{まがたま}の変遷を展示。ここに飾られている勾玉は古代の美を現実再現したもの。その美しさは深遠な碧にしてかくあったろうというもの。卑弥呼の首飾りを連想する。勾玉は古墳時代の神美の象徴であるが、それも全てここから発生した。北西一キロ地点に、花仙山^{かせんざん}がある。ここから産出するめのう原石から造られた勾玉がすでに古代の頃、全国に普及したのである。玉造の地名の発生源に他ならない。中央に巨大な「めのう」の原石が置かれている。今、造られている、数々の装飾品は、「めのう」の深い緑をたたえており、その透明度の高さは美の極地ともいえる。

穴道湖

穴道湖は空からも、玉造温泉に向かう道すがらからも、ティファニー美術館のテラスからも覗いたが特に夕刻、陽が沈む景色は最高に美しい。与謝野鉄幹はその光景を思い浮か

べ、この湖を「碧雲湖」と喩えた。湖は潮と淡水が混じる汽水湖で、平均水深は一メートルと浅い。最深のところでも六、七メートルという。この条件から湖全体で「蜆漁」^{しじみ}がさかんである。漁師は月火木金の週四回蜆を獲る。漁師の平均年齢は六十五歳。一日の水揚げ量は約八十キロで漁獲高は五十万円。平均年収は八百万円だという。結構なものだ。近在には工夫を凝らした蜆の佃煮を売っている旅館では必ず蜆の味噌汁が出る。味噌汁はほど良い甘味で蜆は身がしまっていて美味い。

斐伊川

玉造温泉伝承館から再び出雲大社近郊を抜け、島根県の西方、日本海側に位置する大田^{おおだ}市^しへと向かう。道すがら大社^{おおで}に近づく^おとあちらこちらの家に極めて特徴のある松の剪定が見られる。これは築地松^{ついでまつ}といい、家を囲むように立つ松の木々をちょうど垣根のように立体形に刈り取ったものだ。このあたりは季節

風が強いので防風林の役目を担う。もうひとつ、後述する斐伊川ひいかわの氾濫に備えた。したがって昔は水害対策として各家に堤防が築かれ、さらに築地松が林立する構造になっていたという。古く伝統がある家は立派な築地松を保有していることもあって、つい最近まで、例えば、婚姻を結ぶ際などに家の格式を示すステータス・シンボルになっていた。

また、家々の屋根瓦の形状と光沢には他の地方には見られぬ特徴がある。瓦は石州瓦せきしゅうがわといい、表面に釉薬を塗り、千三百度の高温で焼く。この土地特有の粘土質が高温焼成を可能にし、風圧、雪圧などともせぬ頑丈で、見た目にもつややかな光沢瓦を現出する。石州瓦は石見いわみを代表する瓦で、ここから各地方に伝播した。また、屋根に鯰なまこを備えた家が多く見られる。通常鯰は、お城の天守閣になじみ深い。鯰は架空の動物であるが、目をかっ
と見開いており、人々は火災、泥棒、災難除
けを託し、念じた。

出雲大社側から宍道湖に注ぎ込む大河が斐伊川である。この川こそが出雲の母なる川で有名なスサノウノミコトのヤマタノオロチ退治伝説の現場である。物語は以下の通り。ある日、スサノウノミコトが通りかかると近隣の老夫婦と一人娘が泣いている。ミコトがわけを訊すと、これまでに娘七人までが大蛇だいじやの犠牲になり、残る一人の娘の命脈もあぶないと告げる。ミコトは大酒を用意させ、大蛇の潜む上流へと向かい、酔った大蛇を退治する。尾を断つと何かに当たり刃こぼれした。それが天皇家を象徴する三種の神器、天叢雲剣（アメノムラクモノツルギ＝草薙の剣）であった。大蛇は、八つの頭と尾を持ち、背には松や檜が生え、雲つくばかりの巨大なもの。斐伊川は真っ赤な血に染まる。子供の頃、黒の氷川神社に亡き祖母がよく連れて行ってくれた。祭礼の折りには、ここでもヤマタノオロチ退治のお神楽かぐらが催され、こわごわ背伸びして見ては神秘的なおののきを感じたもの

だ。氷川神社は全国至る所にあり、いずれもスサノウノミコトを祭神としている。すべてこの斐伊川の伝承を発祥としている。すなわち斐伊川は、氷川の語源なのである。その昔斐伊川は暴れ川とも云われ、度重なる洪水をもたらしした。神話の原点もその時の濁流が先人には大蛇のごとき姿に映ったところにあると思われる。先述の個々の家を囲む堤防と築地松も洪水や風害に対処した備えである。なぜこのような洪水が多発したのであろうか。斐伊川は天井川^{てんじやうがわ}として知られる。天井川とは川の水位が周辺の土地よりも高い川のことを言う。斐伊川が天井川になった理由にこそ出雲の存在価値が隠されている。すなわち斐伊川の上流域は古代より鉄の一大生産地であった。上流山間^{やまあい}の風化土層を切り崩して採取した極めて良質の砂鉄をもとに鉦製鉄^{たたら}が早くから行われていた。その結果大量の土砂が下流域に向かって押し流され、堆積し、天井川を形成し、それがために度重なる洪水が発生し

たのである。さらに、製鉄には燃料として大量の木炭を必要とした。そこで中国山系の豊かな森林伐採が行われ、洪水に輪をかけたと思われる。出雲では鉄の製造技術を持つ人々が移住し、古墳時代から鉄の生産を始めた。鉄器具による農地の開墾、武器の製造がもたらした富、そして巨大な豪族が誕生する。その後、大和朝廷による統一が行われる。神話の底辺はこのことを物語っているのではなからうか。山間の斜面に作られ、ふいご（送風装置）の代わりに吹き上げる自然の風を利用した古代の製鉄技術ではその後に作られた高品質の刀剣には及びもつかぬものであろうが、鉄の刀剣そのものが銅に代わる極めて貴重な産物であった。しかし、出雲で作られた鎌倉時代の鉦製鉄による玉鋼^{たまはがね}刀剣類は現代の技術をもってしても及ばぬほどの高品質、高水準のもの。斐伊川をはじめとして出雲に向かう中国山系に発する川は網の目状に存在しており、ヤマタノオロチの八つの尾を象徴し

ているかのようなのである。そして上流の至る所に古の製鉄所があったのである。真つ赤に流れた血は洪水によって鉄さびが押し流されたとも想像される。だが、この洪水が肥沃な平野農地を造成していった。

石見銀山

石見銀山いわみぎんざんと聞いて、銀採掘の廃坑の跡にはあまり関心はないなと思った。訪問してみるとこの最初の思いは吹き飛んでしまった。銀山大森町には江戸の空気がそっくりそのまま残っている。現代において大森町は、大田市に属する。そこは出雲から日本海沿いに西に運んだところにある。

大森の特徴は、武家、商家、民家が混在していることである。山肌を縫って登る銀山川を挟むかのように、細長く家屋がある。川のほぼ中央から山に向かって上が石見銀山の跡で、下側が江戸時代の街並みである。

石見銀山跡を逍遙した。銀山橋を渡るとす

ぐに右手に番所がある。ここからは自然の山並みで植物相が色濃い。木々が生い茂っている。しかしこの清流の左右、あちこちの山肌に古色蒼然とした石垣が見られる。ここには戦国時代から銀の採掘に従事する人々の民家が密集していた。石垣はそうした人々の住居跡である。今は当時の面影は想像するしかない。空気爽やかな自然の山道である。全盛期、大森には約二十万人の人々が住んでいた。江戸が百万都市として世界一の人口規模であったのだから、およそ五分の一の人口がこのような山間地に住んでいたことは、信じ難い事実である。実際には十数万人であつたろうと見る専門家の指摘があるが、それにしても凄い。

時移り、現在の人口は四百七十人。大森小学校の生徒は今では十数人という。銀の採掘で賑わった町から山間の自然美に帰り、周辺全体を世界遺産候補の博物・美術館に変えたのである。往時百を超す寺社があつたといわれるが、現存する寺は十数社。山肌の森の

木々を縫って江戸時代の社をかいま見ることが出来る。豊栄神社、極楽寺、安養寺、清水寺、佐毘売山神社などである。鬱蒼とした山道をせせらぎに沿って登っていくと、左右にいくつもの間歩（坑道のこと）跡が見えてくる。佐毘売山神社は、龍源寺間歩の近くにある。銀精錬の「灰吹法」導入の地として注目されている山神様である。

石見銀山は、十四世紀から正に宝の山であった。そのため土地の争奪戦を巡って権力闘争が繰り広げられた。最初に銀山を手中に収めた大内家から、尼子家、毛利家と続く。そして徳川家康が天下を取ると即座にこの銀山を手中に収めた。なにしろ関が原の戦いに勝利したのが慶長五（一六〇〇）年九月十五日。それからわずか十日後に、家康は石見銀山を押さえたというのだから恐れ入る。彼はのどから手が出るほどにこの銀山が欲しかったということである。豊饒な富をもたらす、石見銀山を手中に収めるものは天下を取るとは正

にこのことだ。その日から大森は、九州の日田や長崎などと同様に徳川の天領地となったのである。銀山を取ると、家康は江戸から大久保石見守を派遣した。この人は現代風に言えばマルチ人間で、技術から経営までの才に長けており、大森銀山の採掘技術から行政にいたるまで十二年にわたり、腕を振るった。彼には腹心の部下がいた。吉岡出雲。慶長年間の銀の産出量は、四、五千貫（四千貫は十五トン）といわれているが彼なくしては、その運営はこれほどに上手くはいかなかったといわれる。さらに練達の士が任務に就く。安原備中守、宗岡佐渡守。安原は銀鉱発掘のスペシャリストでもあった。ご兩人共に元は毛利の家来であり、毛利家が人材育成を大切にした成果を見るのである。以上の人たちは、今、間歩に寄り添うように眠っている。

龍源寺間歩は銀山の上部にあり、江戸後期に発掘が開始されたこともあって唯一見学が許される廃坑である。入り口の上には神棚が

あり、坑夫は身の安全を祈願し、入った。何しろ狭い。ひんやりとした鑿の跡あざやかな穴道を行くと、人一人が這いつくばるしかない探り跡が左右にいくつもある。こうして本坑を中心に銀鉱脈を探り当てていったのである。銀山全体で間歩は五百余りに及び、一大地下網を形成していた。正に天下一の銀山であつた。

しかし、坑夫の作業は命がけである。粉塵を肺に吸い、平均寿命は三十歳以下。二十五歳に満たぬ歳で落命した人もいる。ここでは三十歳になれば、鯛の尾頭付きで祝つたというくらいである。無論、防塵対策は講じている。木の枠を作る。絹布を張る。そこに梅肉を塗布する。つまり当時としては最高のマスクである。坑夫はサザエの壺に油を入れ、灯りとなし、昼夜二交代で間歩に入る。酸欠を防ぐための送風装置もあつた。銀鉱石を採掘する者、狭い坑道を縫って運ぶ者。役割分担があつた。

坑夫らは決して奴隷ではない。このような危険な仕事を生業とするに相応しい待遇が保証されていた。それが現代社会に見られる諸制度ばりの、当時とすれば時代の先端を行く社会制度である。まず賃金が高い。次に現代でいう、育児手当、厚生年金、労災手当が施されている。もうひとつ面白いのは「お囲い村」制度で一定の年数、坑道に従事した人は、この村に入る。そこは免税域なのである。命あつてのものだねとはいえ、こうした優遇処置が行われていた。

掘り起こされた銀鉱石は、一次精錬され、年に一度銀の道を通り大阪に運ばれ、一分銀、二分銀、銀小判に造幣。江戸に送られたのである。この運搬作業も当時とすれば大事であつた。また、銀鉱石の精錬法は灰吹法はいふきほうと言つて、当時の先端技術であり、後年、この技術が佐渡金山に持ち込まれたのである。

銀山には当時の役人の住居も残っている。高橋家住宅跡もそのひとつで路沿いに古びた

江戸時代の一軒家がある。高橋家は言ってみれば銀山坑夫の労務管理を代々担当してきたようだ。

銀山を登り詰めた正面に山の頂（要害山）が見える。ここにかつては山吹城天守閣がそびえていた。この城は大内、尼子、毛利、徳川にとって極めて重要な拠点であった。

銀山ルートのほぼ中央に位置する銀山公園の側に羅漢寺がある。自然の岩壁をくり抜き、二十五年の歳月を要し制作された五百一体の羅漢石像を収めた寺で、一七六六年（明和三年）に創建。その目的は、銀山坑夫の霊を供養することであり、寺の創建には、田安中納言宗武（八代將軍吉宗の次男）をはじめとする、多くの人々が支援した。古色蒼然とした風格のある自然寺である。

銀山公園から大森の江戸町へと下る。現代においても人々の生活の場ではあるが、江戸の街並みがそのまま残っており、時代小説を書くものには格好の資料館ともいえる。金森、

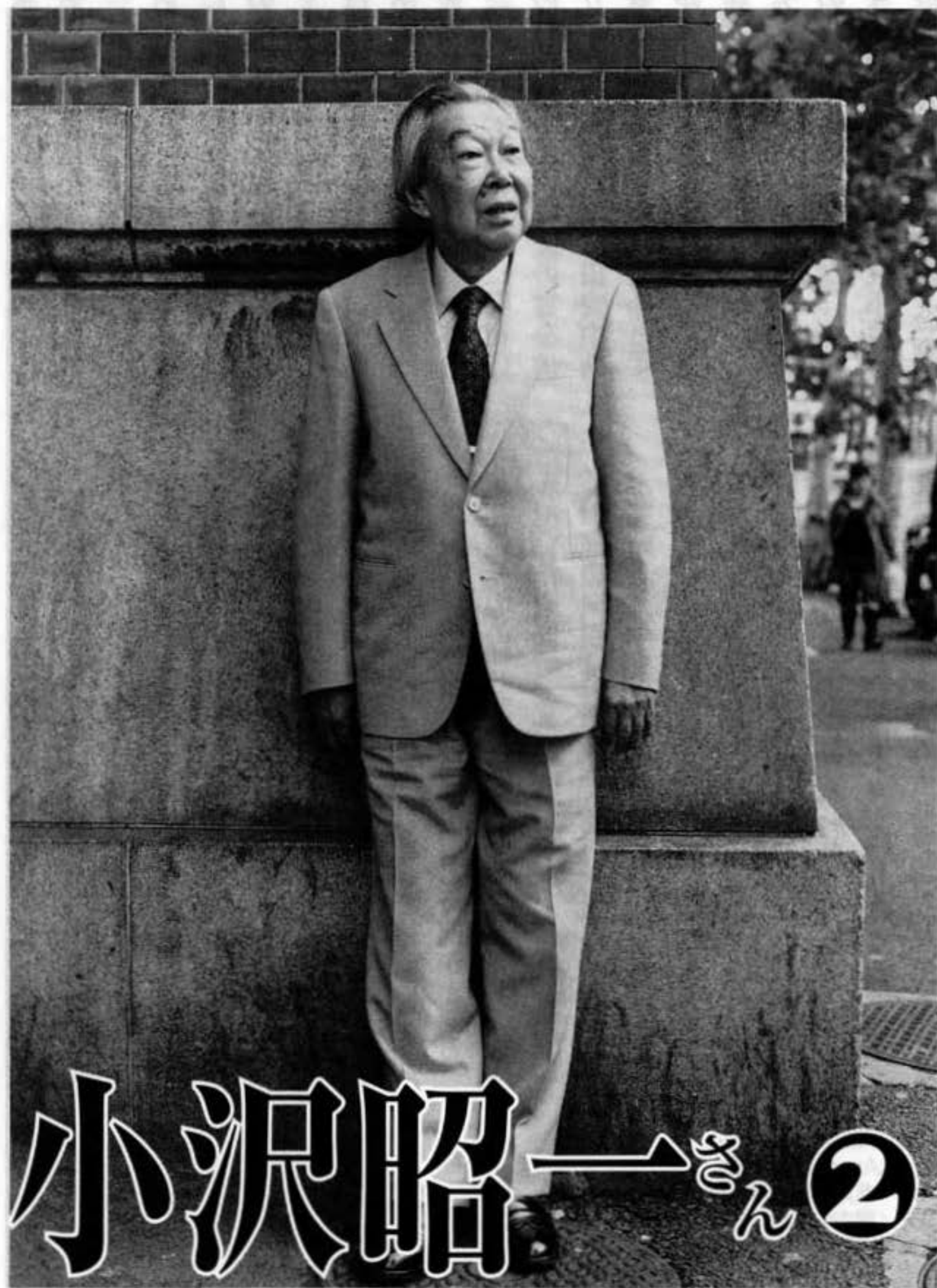
宗岡、三宅、阿部、河島、青山といった武家屋敷が民家と隣り合わせにある。旅籠も江戸時代のもの。銀山と江戸町を含め今大田市は世界遺産登録を目指している。家屋は傷むので修復が要る。昔の姿を留めて復元する工事が所々で行われている。修復に当たっては通常の民家の場合、一世帯ごとに五百万円の補助金が出ている。江戸建築に長けている大工さんが近在していることは救いである。しかし豪家の修復には法外な手間と時間がかかる。現在復元中の熊谷家は、金融・酒造などを営んでいた豪商で、その費用はざっと八億円。

旧家の屋根は石州瓦で鯱、大黒様が家を守っている。中央の広場に到ると、立派な代官所がすでに修復を終え、一般に公開されている。代官所を過ぎると、大森町を見渡せる位置に城上神社がある。社殿の左側に楠の大木、右側にはナギ。大火に襲われる一八〇〇年までここは鬱蒼とした木々が織り成す杜（もり）であった。大森という地名の由来である。（つづく）

（著者プロフィール）
Mori&Associates代表。
環境・廃棄物調査等。その他
海外／国内の広告・マーケティング調査。
太極拳講師。

連載

会いたい人 関 容子



小沢昭一さん ②

撮影／タカオカ邦彦

小沢さんが中学生のころから尊敬してやまない名随筆家がいる。

「正岡容先生^{いさる}。ぼくの好きな寄席の世界を言わば芸術としてキチツと認めるようなエッセイがよかつたんです。当時、寄席は一般的には紳士貴顕^{きけん}の出入りするところに非ず、あまり上品なところではない、と言われてましたからね。人間国宝の噺家が東西で出るなんてことは考えられない時代でした。正岡先生との出会いは新宿の末広亭。寄席は十日替りですから、三十一日ある月は一日あくわけです。その日を使って先生が、落語をテーマ別に並べたりして一種の研究会を開くんですね。そこへぼくと大西信行が入会して、だんだん楽屋へも入れてもらえるようになった。呼び込みを手伝ったりしましたからね。中学五年くらいのとときで、学生服着て楽屋に座ってたなら、文楽さんが、こんな若い学生さんが寄席をお好きとは何ともその、べけんやですな（笑）、なんて頭撫でられたのは忘れられません」

そのうち小沢さんも大西さんもいつの間にか、正岡門下ということになった。

「うちに遊びにおいでと言われて、市川のお宅へ伺うようになったらやがて弟子つてことになっちゃった。通ってるうちに、ぼく俳優になりたいんです、と言ったら、あ、そうか、よし、つてすぐに新派の花柳章太郎さんに紹介状書いてくれました。先生は新派の芝居も書いてましたし、交友も広い人でしたから。でもそのころぼくは新劇に傾いてたものですから、そう言うのと、だったら俺の話芸の弟子になれ、つて。話芸に自信あるんですよ、自分で高座に出たりしてますしね。永井荷風さんを気取ってたのかも知れません。荷風さんは歌舞伎の狂言方になったり寄席の高座に出たりしてますから」

上方落語の重鎮桂米朝さんは、最も古い正岡門下と聞いている。

「先生がまだ大塚に住んでたころ、米朝さんはやつぱり随筆読んであこがれて門を叩いた

んです。まだ噺家になるなんて気がない、学生時分の話ですよ。そしたら、今は上方落語が衰退してるからお前噺家になれ、って先生に言われて、そうになった。これだけ見ても先生の業績はすごいですよ。衰退していた上方落語は、米朝さんたちの活躍で息を吹き返して今や上方落語は隆盛ですから。それで米朝さんはぼくの兄弟子ですからぼくの芝居を観に来て、言葉の間違いを指摘してくれたり、批評してくれたりとしてくれますからね、ありがたいのです。」

小沢さんは旧制麻布中学を卒業し、早稲田第一高等学院（二年生で新制大学に移行）に入学したが、落語への愛好は下火にならず、クラブ活動も落語がテーマだった。

「今で言うオチ研の元祖みたいなものですけど、当時は何で学生が落語のことなんか調べるの、って許可されなかった。それで芸能文化研究会という名前にして、てるおか暉峻康隆先生が

ずいぶん頑張ってくだすって実現できたんです。昔は庶民は寄席で学問した、というけど本当ですね。寄席の芸能のおかげで世の中のことが、たとえば本妻と妾の関係とかが具体的によくわかった（笑）。落語も浪花節も講談も漫才も……ぼくの底にはずーっと動かずにあるようです」

しかし小沢さんをいつ気に新劇に傾けさせる芝居に出会う。ソートン・ワイルダーの『わが町』。ニューイングランドの田舎町の平凡な日常生活を描きながら、時の流れを中断したり逆のぼったり死後の世界に及んだりする手法の斬新さに詩情が漂い、私も深い感銘を受けたおぼえがある。

「とくに生き死にの問題を扱ってて、人生の無情観にうたれました。落語じゃこういう深い感銘はないな、と思っちゃったわけです。間もなくそれは間違いだったというのがわかって、落語のほうが深いぞ、人生を描くについて、こっちの方がオトナだと思ったんで

すが、そのときは新劇一辺倒になって、ありとあらゆる芝居を観て歩きましたね。赤坂とか日本橋とか焼け残った会場でいろいろやってましたから。藤山寛美なんて人は、まだ名前も出なくてちよこつとしか出ないころでしたけど、ぼくは認めました。これはすごい役者になる、って。そういうの探すの好きなんですよ」

そのころ最も小沢さんの心をゆさぶったのは俳優座主催の「創作劇研究会」第二回公演、森本薫の『みごとな女』に出演した堀阿佐子の存在だった。

「ぼくはものすごく好きでしたね。菅文代すがふみよという本名で文学座にいたころは目立たなかったらしいですが、俳優座に移ったらパツと花が咲くみたいに、目を見張らせる輝きが出た。情感たつぷりの女性でありながら知的で、これあんまり両立する女優って少ないんですよ。心理の微妙な動きを適確に表現しますしね。たとえば感心したのは、『賢女気質』と

いう芝居で、彼女が離れの一室で男からキッスされる瞬間、母屋へチラツと配った目使い一つで芝居全体がわかる、といった具合いです。いわゆる台本の奥が読める人だったんですよ。彼女の芝居はたて続けに三本。川口一郎さんの『田宮のイメージ』では、またいつそう瑞々しさと賢さが増して……いやあ、あんないい女優をその後舞台で見てませんね」

その後小沢さんは、劇場の客席で偶然堀阿佐子と隣り合せになるという幸運にめぐり会った。

「あこがれの堀阿佐子ですから胸が高鳴りました。休憩時間になったらハンドバックからフランス語の原書を取り出して読んでるんですよ。ぼくは早稲田の仏文ですのに横目で見ても、わからない。せめて題名だけでも思っただけ、ちよつと置いたときに見てみたけどわからなかった。ロビーに出てみると彼女が女性トイレの長い列に並んで、困ったな、という顔をしてました。そこで友だちに会ったん

で、ぼくがあゝの堀阿佐子のポンプになって汲み出してやりたいね、って（笑）。帰ってから自分で言ったその冗談が気に入って、そうだペンネームは堀凡夫にしよう。で、さっそくフランス語の辞書の裏側に、筆で堀凡夫と書きこみましたよ。まアバカですが（笑）。」

早稲田の学生劇団は「ともだち座」以来の伝統がある。昭和二十三年五月、小沢さんは大隈講堂で、当時の「学生劇場」公演、チェーホフの『路上』に出演していた。

「そしたら友だちが、お前のおつかさん来たよ、って言うんです。行ってみるとお袋がしみりしてお銚子から酒を注いでくれて、お飲みよ、って。どうしたのかと思ったら、堀阿佐子が自殺、って新聞に出てたんですね。ぼくが大好きなの知ってましたから、ショックだろうと思って、そうやって来てくれたんです」

堀阿佐子は『フィガロの結婚』のシュザンヌという大役に抜擢され、その稽古の最中、

二十五歳の若さで自ら命を絶った。

「これはビックリで、ショックでしたね。亡くなったあとで聞いた話では、彼女は新聞、雑誌の写真から、愛のある男女の風景というのをスクラップしてたというんですが、女優さんでそういう人はなかなかいないんですよ。みんな感性でだけ生きちゃうんで、そんなふうに、演技の参考になる資料を収集するなんて、男っぽいことをしてたんだなあ、とますます尊敬しちゃいました」

その年の秋、俳優座が俳優養成所を開設して、生徒募集を発表した。

「よおし、堀阿佐子が見ちがえるように変わった俳優座はスゴイなって受験して合格しました。公募は初めてだったんですが、それまでにいた研究生を一期としたんで、われわれは二期になります。高橋昌也や菅原謙二が同期にいました」

そして四期に、のちに小沢さんと結婚することになる素敵な女性、英子^{えいこ}さんがいた。

「ぼくの口から言うのもへんですが、あの、優秀でした（笑）。自分の言葉でせりふがしやべれる、とても実在感のある人で……でも女房にしたいものだから、俺を助けてくれ、そのかわりお前の分もちゃんとやるから、なんて言っとうとう女優をあきらめさせちゃった。」

ところで小沢さんとは俳句仲間の富士真奈美さんによると、

「昭ちゃんの奥さまって、頭がよくてしつとりとして、女の美德を総て備えてるような素晴らしい人よ。若いころの昭ちゃんは多忙にまぎれて放ったらかしにしてたものだから、このごろは奥さまが珍しくてしようがなくて、暇さえあればへばりついてるんですって（笑）」

とのこと。小沢さん自身のエッセイでも、来世も是非よろしくと女房に頼んだら、迷惑そうな顔をされた……というのを読んだ気がする。

それにしても、小沢さんにとって堀阿佐子は永遠の女優儀なのだろう。何年前か、こんなこともあった。

「杉村春子先生が最後の入院をなさったとき、新劇俳優協会の主催で先生のお話を聞こうというので、東条会館に会場をセツトして俳優ばかり何十人かが集ったんですが、結局おいでにはなったんですけど、無理だわ、ってことでお帰りになった。でもぼくはその前に控え室のほうでお目にかかったんですよ。で、堀さんが文学座から俳優座に移ったのはなぜなんでしょう、って伺ってみました。そしたら先生は堀阿佐子をわりと認めていらつしやいましたね。彼女は聡明な子だったから、俳優座のアカデミズムに惹かれたんですよ。文学座はそういう演技の勉強のし方はやらなかったから、って。杉村先生はそれから何日もしないでお亡くなりになったので、結局ぼくは最後のお話を聞けたことになるんです」

（つづく）

へんび でんぶ やじん けどう
辺鄙の田夫野人の化導は日浅し、是れ則ち年来の本懐なりしか共、
時いまだいたらざれば、思いながら年月を送る所に、此の時年来
の本意を遂げる事併し^{しか}ながら朝恩なり。

〔讃岐在国の間、門弟に示されける御詞〕

都から遠く離れた地方の人々がお念仏の教えに導かれるようになってから、まだそれほど日は経っていません。そうした地方の人々に教えを説くところ、私の長年の望みでしたが、いまだその機会に恵まれませんでした。そう願いながら星霜を重ねてきたところ、時、ここに到ってその望みを果たすことができるのは、（流罪というよりは）むしろ朝廷からの賜りものと言えましょう。

「間」をとれる生きもの

編集を担当している雑誌の仕事で、大本山増上寺法主・成田有恒台下にインタビューにうかがった。「作家・寺内大吉」と言い直せば、より多くの方におわかりいただけるだろう。以前（もう三十年くらい前か……）は、テレビでキックボクシングの解説などもされていた、「マルチ」な方である。

台下とお会いしてお話をうかがう機会は、これまで幾度となく与えていただいたから、聞く人の心をつかんで離さない軽妙な語り口も、知識の引き出しの多さ、ご見識の深さも存じ上げていたつもりではあった。が、今回のお話は、筆者にとって今までのどのお話よりも、「！」を示唆してくださるものとなった。

「七十五歳で四国流罪が決まった上人は、流される、というより、そこでお念仏を弘めよう、と観光旅行にでも出かけるようなお気持ちで海を渡られた。これは容易なことではないですよ。平和を願った法然上人、人と人が争うことを望まなかった法然上人ならではの、です」

インタビューはこんなプロローグで始まった。と、一呼吸おかれて、「ところでね、〈人〉と〈人間〉の違い、あんなたち、なんだかわかるかね？」と、ニコニコされながらのお問いかけ。あんなたち、とはもちろん我々取材ク

ルーである。

わかるようで、わからない、どう答えていいのか……。同じ戸惑いとあせりをあからさまに顔に出してしまっていたインタビュアーとカメラマン、筆者の三人が、申し合わせたように顔を見合わせた。

「人と人が出会うから〈人間〉なんですよ。そうでないなら、単なるヒト科の動物。……人間の〈間〉は〈ま〉と読むでしょ。上手なコミュニケーションのコツはくつつぎすぎでも遠ざかってもしけないということ。何かの関係が〈ちよつとヘンだな〉と感じる場合は、この〈間〉の取り方が悪くなっていることが多いね」

一同、声にならない。わずかに三様の小さな唸り（納得の）だけが確認できた。台下は、そんな我々にやさしい眼差しをくださりながら、

「それは、親子関係でも、教師と生徒でも同じこと。仏や神にさえ密着し過ぎると狂信者になってしまう。テロがそうでしょ。〈間〉の取り方が大事なんですよ。お念仏を根底に〈間〉が取れていれば、平和な関係は築けるんじゃないかなあ」

こんなことは考えてみたこともなかった。

間——。この、たった一文字が潜めていた意味合いは、それほどまでも大きくかったのか。複雑怪奇にもつれ合ったありとあらゆる絡まりをほどく端緒、それが実はこの「間」ということだったのか。

普段、間がいいだの悪いだのと、何気なく使っている。だが、この場合は不可抗力のタイミング、といった意味であるように思う。しかし台下のお話では、「間」は、ある程度は自分で差配可能であり、またその差配をする努力は怠るべきでない、とのアドバイスと受け取らせていただいた。

それにしても、法然上人が四国流罪を「朝恩」とか「念仏弘通のための好機」と受け取られた、それも「間」であるとおっしゃるのか——。なるほど、そうなのかもしれない。朝廷を対峙すべき相手とは受け取らずに、自分のペースに取りこまれる余裕は、「間」の取り方として最高の模範かもしれない。

「間」をうまくとれずに、「魔」を招くことの多い筆者には、チクリと痛い、しかし有り難いお話であった。今年一年、いや、生涯の座右の銘とさせていただこうと思う。

(小村 正孝)

珈琲のことば

のじかん

その三

「アフリカの豆と酸味」

今回は、「キリマンジャロの誤解」を解くために、いつものカフェDにお邪魔しました。出かける前、我が家の仕事部屋兼居間に張ってある世界地図を確認すると、アフリカの霊峰キリマンジャロは、ケニアとタンザニアの国境にまたがってそびえていました。キリマンジャロという名前だけは知っていても正確な場所は未知だったので、「へえ、そうなのか」と、こんなことも、「珈琲のじかん」が与えてくれるとても素敵な発見です。

そして、いよいよキリマンジャロです。記憶を辿ると、私がこの豆を初めて飲んだのは、高校の頃。当時愛読していた漫画の登場人物が「キリマンのブラック」

を愛飲していたので真似して飲んでみたところ、なんだか酸味とクセが強すぎて……。正直、そんなに美味しく感じませんでした。

「そう、それこそが、キリマンジャロの誤解なんですよ（笑）。キリマンジャロをはじめアフリカの豆はたしかに個性が強いけれど、いい豆をちゃんと扱えば、本来その酸味は他になくきりつとストリートな、やはり魅力的なものなんですよ」私の話に頷きながら、カフェDのマスタ―がそう教えてくれました。そこで今回は、長年の誤解を解き、「強烈だけどよい個性」をきっちり体感するために、アフリカの二つの豆、「キリマンジャロ」

藤原理加

取材協力／Café Clubダン・アロマ（久光康隆氏）



と「ケニア」を飲み比べてみることに。

マスターによると、キリマンジャロはアフリカの豆の中でも比較的バランスが取れているのだそう。だから、「珈琲通は最終的にキリマンより個性の強いケニアにハマる人が多い」とのことです。飲み比べてみた私の感想もかなりそれに近いものでした。とはいえ、マスターが見事な技で淹れてくれたキリマンジャロはもちろん、長年の間違ったイメージを払拭する美味しさです。エッジの効いたきりつとした酸味、すっきりした喉ごし。嫌なクセは全然感じないけれど、個性が弱いわけでもない。その爽やかな薫りは、ブルマンともまた違うアフリカの風を感じさせる独特のもの。人にたとえれば、

“自由で凛とした若者のような味わい”

がキリマンにはありました。だからこの珈琲は、たとえば仲間達と夢や趣味や仕事についてワイワイ語り合う時間にきつと良く似合う…（二方、「その一」のモカ・マタリは一人で恋などを思う時間にぴったりかなと思います）。で、ケニアですが、これはまさにアフリカのサバナのような強くて豊かなコクがありました！凛とした酸味の傾向はキリマンに通じるけれど、その底にはぴりっと刺激的なスパイシーさもあって。元気になりたいときにはぜひ！という感じです。それにしても珈琲豆による世界探訪は奥が深い…。次回は、中国へと飛んでみることに決めました。

浄土門主
総本山知恩院門跡第八十六世

中村康隆

大本山増上寺
法主

成田有恒

大本山
法主 百萬遍

服部法丸

〒606・8225
京都市左京区田中門前町一〇三

大本山清浄華院
法主

大田秀三

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

宮林昭彦

鎌倉市材木座六・十七・十九

浄土宗宗務総長

水谷幸正

大本山増上寺執事長

江口定信

〒105・0011 港区芝公園四・七・三五

法然上人御誕生地

美作 誕生寺

〒709・3602 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL 〇八六七 (二八) 二二〇二
FAX 〇八六七 (二八) 二二六二

〒154・0017 世田谷区世田谷四・七・九

大吉寺

住職 成田昌憲

函館 称名寺

〒040・0055 函館市船見町十八・十四
電話 〇一三八 (二三) 〇五七四

長野教区
十念寺住職

袖山榮真

〒380・0845 長野市西後町一五六八

清水湊

忠高山
實相寺

〒420・0839 静岡市葵区鷹匠
二丁目二四番十八号

玉桂山
華陽院

電話〇五四（二五二）三六七三
FAX〇五四（二五二）三六五六

(学)大乘淑徳学園理事長
淑徳大学学長

長谷川匡俊

〒174・8645 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園
淑徳学園中学校・高等学校

理事長
校長
大谷壽雄

塩釜市

雲上寺

東海林 良雲

浄土宗大願寺住職
浄土宗議会議員

神谷英敏

本應寺

熊谷靖彦

〒844・1411 埼玉市塩田津中町

世継地藏 上徳寺

塩竈義弘
塩竈義明

〒600・8119 京都市下京区富小路通五条下ル
本塩竈町五五六番地

弘経寺住職

(財)浄土宗報恩明照会理事長

金田進徳

〒302・0023 茨城県取手市白山二・九・二八

孤峰山 蓮馨寺 吞龍上人奉祀
宝池院
川越市仏教会長・教誨師

糸原恒久

〒350・0066 川越市連雀町七・一
電話〇四九（二二二）〇〇四三
FAX〇四九（二二六）〇六七六

養運寺

田中光成

〒194・0032 町田市本町田三六五四

平成十八年

赤坂六地藏尊

浄谷土田寺

〒107・0052 東京都港区赤坂四・三・五
電話〇三(三三八三)三六三〇

明福寺

福井豊信

〒132・0013 江戸川区江戸川三・八・一

伊勢教区

山下法文

松阪市樹敬寺

愚鈍院 こつぶがや文庫主

中村眞道
中村瑞貴

〒984・0051 仙台市若林区新寺三・一二・一七
電話〇二二(二五六)六〇五七

〒399・4115 駒ヶ根市上穂栄町九・五

安楽寺

住職 飯田實雄

宗源寺

齋藤价洲

〒110・0015 台東区東上野五・一・六

勝願寺

〒365・0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八(五四一)〇二二七

骨仏の寺

一心寺

〒543・0062 大阪市天王寺区逢阪二・八・六九
電話〇六(六七七一)〇四四四

白本尊阿弥陀如来

静岡 宝台院

貞松院住職

山田和雄

〒392・0004 諏訪市諏訪二・一六・二二
電話 〇二六六(五二)一九七〇
FAX 〇二六六(五二)三四四六

〒112・0002 東京都文京区

小石川三丁目十四番六号

無量山 傳通院

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

定義如来

西方寺

〒989・3213 仙台市青葉区大倉字上下一
電話〇二二(三九三)一〇一
HomePage: <http://www.johgior.jp/>
E-mail: saihouji@johgior.jp

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

九品阿彌陀如来

淨眞寺

〒158-0083 世田谷区奥沢七・四一・三
住職 清水英碩

願行寺住職

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川二・一・一二

梅窓院

住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016 鎌倉市長谷四・二・二八
電話 〇四六七 (二二二) 〇七〇三
FAX 〇四六七 (二二二) 五〇五一

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四・一二・八

横浜

大光院

www.daikoin.com

光取寺

大室了皓

〒141-0021 品川区上大崎一・五・一〇
電話 〇三 (三四四一) 八三八四

800号記念特集

通巻800号という長い歴史は、多くの先達の支えがあって作られてきている。ここでは800号発行を目前にし、『浄土』誌面を飾った方々のお名前を列記させていただく。誌面の都合上、全員のお名前は掲載できないが、表紙を描いて下さった何人もの画家、教化の一助となる一文を寄せていただいた諸大徳、また宗教誌にもかかわらず原稿をお寄せいただいた文化人の方々など、わずかな原稿料、あるいは現物支給という方も少なくないのにも関わらずご協力いただいた方々に、改めて誌面より心からの御礼を申し上げさせていただきます。今月は戦後から現在までといたします。

浄土誌面を飾った人々

【戦後編】

(昭和21年～平成17年まで)

阿川貫達	岸信宏	鈴木大拙	藤堂恭俊	ひろさちや	村岡花子
阿満利磨	北山良祐	関容子	徳川夢声	深貝慈孝	村上博了
家永三郎	北邨謙順	玉山成元	友松圓諦	藤井実雄	武者小路實篤
伊東唯真	隈研吾	高村光太郎	中村吉衛門	藤吉慈海	望月信亨
井上洋治	倉田保雄	種村健二郎	中村元	藤田寛雅	安井香山
稲岡覚順	玄侑宗久	鷹司誓玉	中村素堂	辺見庸	山岡荘八
石井眞峯	香月乗光	竹中信常	中島真孝	丸林久信	山折哲雄
石丸晶子	今東光	田丸徳善	中野善英	松原泰道	山田巖雄
石橋湛山	佐藤賢順	田村圓澄	中野剋子	松谷みよ子	山本恭雄
石上善應	佐藤行信	田中優子	奈良康明	前田龍海	山本空外
池上靈心	佐藤良智	田島栄	仁戸田六三郎	松濤誠廉	八百谷孝保
岩井信道	佐藤治子	武田泰淳	野村宗春	松濤達文	吉川英明
恵谷隆戒	笹本戒浄	宝井馬琴	野島宣道	増谷文雄	養老猛司
大野法道	宝田正道	民谷隆誠	野末陳平	牧田諦亮	若林隆光
大橋俊雄	正力松太郎	立松和平	羽田恵三	宮林昭彦	渡辺海旭
萩原雲来	椎尾辨匡	塚原光男	鳩山一郎	三橋美智也	
小沢勇貫	須藤隆仙	坪井俊映	服部英淳	三枝樹正道	
茅野秀夫	杉谷義純	戸松学瑛	林錦洞	三木清	
亀井勝一郎	菅原伸郎	戸松啓真	林靈法	三木武夫	

浄土 通巻800号 記念

講演会／展示会
のお知らせ

【講演会】

平和のために 仏教とキリスト教 の対話

法然上人の教えとともに
日本カトリック東京大司教

岡田武夫

浄土宗 大本山増上寺法主

成田有恒

対談

おかだ・たけお／1941年10月24日千葉県市原市生まれ。73年司祭に叙階され、91年には埼玉教区司教任命、2000年に東京大司教に任命される
なりた・ゆうこう／大正10年（1921）10月6日東京都世田谷区生まれ。昭和9年浄土宗僧侶となり、以後浄土宗要職歴任、平成3年に浄土宗宗務総長、13年に増上寺第87世法主に。昭和35年第44回直木賞受賞。著書多数。

【展示会】

『浄土』表紙展

創刊号から
800号まで

日時 平成18年1月31日（火曜日）
午後1時より午後3時まで

場所 東京プリンスホテル
マグノリアホール

入場料 **無料**

昭和9年、浄土宗の有志で発足した法然上人鑽仰会は翌年の昭和10年5月に一冊の月刊誌を創刊。その名は『浄土』。戦時中にはやむなく休刊するも、昭和21年3月には復刊、平成18年2月には通巻800号を発行。

日時 平成18年1月31日（火曜日）
午後4時より午後5時30分

場所 東京プリンスホテル
マグノリアホール

（東京都港区芝公園3-3-1 都営地下鉄御成門駅下車徒歩3分）

参加費 法然上人鑽仰会会員 **無料**
（後日、招待券をお送り致します）

一般 **1000円**
（チケットぴあにて取り扱い中 Pコード 606-019）

問合先

法然上人鑽仰会
TEL03-3578-6947
（月～金 10時から16時まで）



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

● 棒

〔特選〕 棒読みの賢人もいて聖夜劇

有村 幸久

暮れになると出てくるにわかクリスマスチャン
の、素人劇というところだろう。聖人には誰
でもという訳にはいかず、年輩のそれにふさ
わしいと思われる人が選ばれたのだろうが、
これが全くの棒読みというから面白い。

〔佳作〕 年用意棒鱈も買い昆布買い

周東 澄江

綿棒に夫の耳搔く冬日向

中島富士子

棒読みの児の童話聞く菊月夜

増田 信子

● 煙

〔特選〕 SLは煙がいのち冬紅葉

片桐てい女

国中を縦横に走り回っていた蒸気汽車
も、今ではごく限られた所でしか動いていな
い。だからあこがれるのだが、汽車車の図体

も、真つ黒な煙を勢いよく吐き出さなければ
変なものだ。まさに「煙がいのち」である。

〔佳作〕 姑の背に小さな煙寒灸

木枯らしや島をなめゆく潮煙

大焚火煙たいと子が後退り

金谷 友江

井村 善也

浜口 佳春

●自由題

〔特選〕 木守柿一つのための夕日とも

中島富士子

その意味についてはいろいろ言われるが、
ともかく柿は全部取るということをせず、一
本に一つは残しておくという風習がある。い
ま夕日が空を染めている。それはまるで、残
された柿一つのようなものであるというのだ。

〔佳作〕 ボート部の奇声浮かべし小春風

鎌研ぎは母の仕込みや吾亦紅

煙の隅風に光りし唐辛子

鳥羽 梓

増田 信子

石原 新



新刊、紹介

大橋紀雄写真集 知恩院の風光



東方出版 1800円(税別)
A4版変型 ソフトカバー・94頁



花それぞれに光あり・白色白光
(御影堂裏)

四季折々の境内の風景、僧侶の様々な表情、
光と風に満ちた知恩院に共生の世界を表現し
た写真集。

どの一枚からもそうした撮影者の気持ちが
伝わり、落ち着いた気持ちにさせてくれる。
この一冊が手元になれば好きな時に総本山に
お参りできる、そんな一冊だ。

問合先▶ 大橋紀雄 075-841-2088

浄土誌上句会のお知らせ

題

⑤季語ではありません

洋落自由題

締切・二〇〇六年一月二十日

発表・『浄土』二〇〇六年四月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

おおはし・のりお

1940年京都市生まれ。浄土宗京都教区 西方寺住職
社会福祉法人平安養育院/理事/施設長
浄土宗芸術家協会理事
日本リアリズム写真集団会員

出版記念写真展

大橋紀雄写真展 知恩院の風光

平成18年

1月24日(火)~29日(日)

京都府

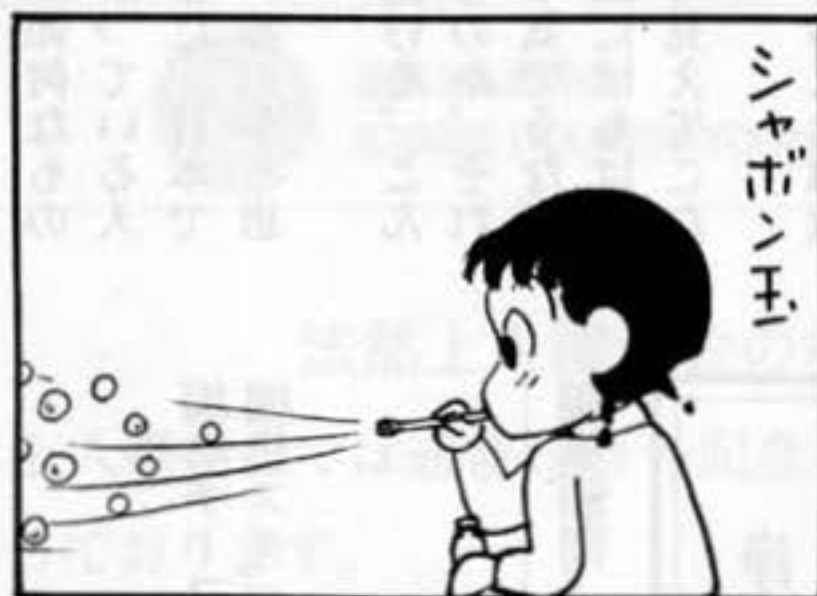
京都文化博物館

ミュージアムギャラリーにて

さっちゃんねネッ

25 かい目

かまち♡ふらう



編集後記

去年今年思いのたけはから回り 岱潤

去年は人間不信が益々強くなってしまった。

行政書士が他人の戸籍を勝手にとって、身元調査をする探偵社に売っていた。いわゆる部落調査である。そんな事件が明らかになった。そしてあのマンション構造疑惑事件。販売会社、建築会社、一級建築士、そして検査会社と総ぐるみのとんでもない事件が明らかになった。偽医者、偽弁護士は後を絶たず、庶民をターゲットに振り込め詐欺、リフォーム詐欺など詐欺事件がもはや日常化している。先日私のところまで振り込め詐欺の手紙が届き、私もみんなの仲間入りをした

という、妙な笑みがこぼれてしまった。しかし詐欺をする側の心理は如何なものなのであろうか、楽して儲かっている人の映像がテレビで流れるたびに、日本ではまた一人詐欺師を作っているのかと思ってみたりする。

楽して、早く、たくさん儲ける。こんな三原則がまかり通っているのか、それに超したことはないなどと平気でうなづく人々が意外に多い。この国にはもはや倫理も規範も宗教もまったく見えてこなくなってしまった。

年が改まっても、何も変わることはないだろうが、せめて命だけは守ることが出来るようになってもらいたい。これも甚だ難しい国になってしまった。(長)

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々
飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
江口定信(浦安・大蓮寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
北山大超(焼津・光心寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮真(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
真野龍海(芝・天光院)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkkan-jodo.info>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十二巻一月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十七年十二月二十日

発行 平成十八年一月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四 明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

月刊 浄土 もうすぐ 800号



法然上人鑽仰会

HOUNENSYOUNIN SANGOUKAI



法然上人鑽仰会

月刊「浄土」

浄土の広場

月刊「浄土」検索



| お知らせ | 会員募集 | サイトマップ | メール |



法然上人鑽仰会

(C)2002 HOUNENSYOUNIN SANGOUKAI. All rights reserved.

法然上人鑽仰会のホームページご紹介

法然上人鑽仰会では通巻 800 号記念事業の一環としてホームページの整備を行っております。

ホームページでは今までに刊行された浄土の目次検索や一部本文の検索などができますし、内容も一部提供してインターネット上でお読みになることができます。

また浄土の広場では、インターネット上から俳句の投稿などもできます。どうぞご覧ください。

<http://honen.sangou.net>

<http://gekkan-jodo.info>

法然上人鑽仰会の

本



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法47×59cm



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円

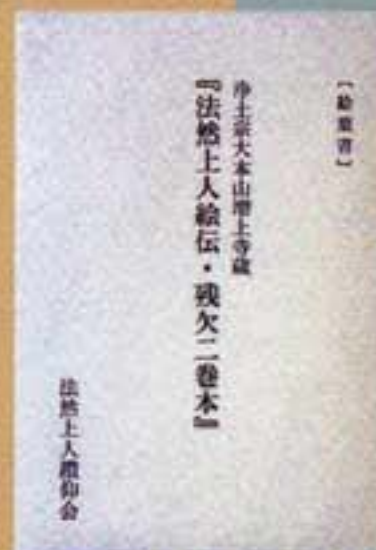


『差出人は法然さん』
600円

選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円(別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より

「ブッダ
知れば知るほど」
1,000円



当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話 / 03-3578-6947
FAX / 03-3578-7036